

農業委員会 だより

発行:新島村農業委員会

編集:新島村農業委員会広報部会

〔今期担当:前田忠徳、宮川寅男
羽根和美、植松一男〕

農業委員会事務局(役場内)

5-0284(直通)

ブランド品種「ヒカリ」

新島特産の「ひかり」(光豆)と言つ絹サヤエンドウ、その歴史は昭和四十年代に突然変異で出来たことから始まる。他品種と交配させず、良い実を選別した中から採った種を翌年に撒く。毎年繰り返して十数年かけて作り上げた、今や新島にしかない貴重な原種。名の通り、実がピピカ光つて見えることが特徴である。



キヌサヤエンドウの実

1人でずっと「ひかり」を守って来られた農家さんも高齢で耕作出来なくなつたため、私自身、種を譲り受け数年前からこの貴重な原種を栽培している。

キヌサヤ栽培で一番大事なのは選別で、サヤの大小、種の膨らみ、サヤの形など1個ずつ確認している。病気に弱い
ため栽培が難しく、サヤが小さく収穫量

も少ない上に、摘み取りも一つひとつ手作業のため手間のかかる野菜である。



畑に植えられた
キヌサヤエンドウの様子

しかし、それゆえ市場では高価格でも人気が高く、かつて新島ブランドとして出回つたが、離島ブームも重なり生産性の低い「ひかり」の栽培農家は減つてしまった。また以前のような「光豆」の活躍を復活させたいものだ。(前田忠徳)

大原のオアシス

担当地区の農地利用状況を調査していると、手付かずとなつた農地、竹藪や林と化した農道が多く見られる。農業の担い手は高齢化し、畑の維持が困難となり遊休農地が増えているのが現状のようだ。そんな中にも光が一つ…。

友達の案内で農道を散歩していた際、

大原地区の道を少し入つた所に突然オアシスが現れた。荒れていた場所が花木園に生まれ変わつていたので。清水ご夫妻がお孫さん誕生の記念として河津桜を植樹したのがきっかけで、丹精込めて作り上げた場所とのこと。四季折々の花や実がなり、知る人ぞ知る憩いの場所である。人が入ると荒れてしまうのでは…と心配すると、「楽しんでくれる人がいと嬉しい」と話され、いつも気持ちよく丁寧にご対応下さり、感謝に堪えない。



記念樹である河津桜

我が家の畑では、主人が夏野菜、薩摩芋を収穫し、私は今年初めて玉ねぎ2種類と小松菜や水菜、頂いたホウレン草の種をまき、芽が出てきたところだが、ただか200mを耕し畝を作るだけで、腰を痛め情けない状態。それでも四季折々の果実や花を植え、ハーブ畑を作り、野菜を育てる…そんな計画を練って、や

る気スイッチは常にON。器量の悪い野菜でも安心安全、新鮮な野菜を取り入れ、子供や孫に食べさせたい。



大原のオアシス

見て楽しい、採って嬉しい菜園づくりを楽しみ乍ら、我が家のオアシスづくりに奮闘中☆羽根和美

農業委員会&有害鳥獣駆除対策検討委員

私は農業委員になって十数年、同時に有害鳥獣駆除対策検討委員を兼務し年2回の検討会に出席している。検討委員会は村を軸に東京都、鳥獣保護員、鳥獣巡視員、農業者、調査会社等からなり、現況報告や今後の方策等を検討し、その内容を農業委員として報告している。鹿は学習能力が高く、罠の近くに近寄

らず生息地域も人の入れない場所に移動しているため捕獲が難しい。特に新島山は、平成24年秋、緑に覆われていた場所に何十本の獣道が出来、土が露わになり、土砂崩れを心配するほどだった。



平成24年秋(新島山)
白く見えるのは獣道、奥の島が利島

数年前に罠の設置が可能となり、捕獲開始から大分成果が上がっている様で、平成28年には緑が元の様に戻っていて一安心した。厳しい登山道を登り、罠を設置した捕獲効果の現れかと思うと、捕獲巡視員のご努力に敬意を表したい。

最近では被害報告も少なくなり、以前推計800〜1200頭だった生息数も現在では600〜800頭との報告を受けている。やっと減る方向に進み始めたかと思いつつも、まだまだ多い鹿の被害をなくすまで捕獲や防護方法の研究、

地域の検討をする必要がある。

村は単管パイプやネットを補助しているが、設置や維持の労力は高齢化の進んだ農家にとって非常に重い負担となっている。鹿の被害を減らすと共に、高齢でも軽い負担で農業従事出来る様にする事が農業人口の増加につながると考えている。(宮川寅男)

畑での座談

私たち捕獲巡視員は、鹿による農作物被害を減らすために、鹿罠を設置し、村内から山に移動した鹿の調査や捕獲のために登山している。



登山の様子(新島山)
山には約150基の罠を設置

以前より畑での鹿被害が少なくなり、「前は頻繁だった鳴き声が、今はたまに

聞くだけなので、鹿が減ったのでは？」と辛掘りをしている農家に言われる。



新島村全体で2,153基
設置されている鹿罠

昔は畑を諦める人がいる程の被害だった。子供同様に育てた作物が荒らされるのは身を切られる思いだっただろう。



樹皮の食害や角とぎによる立ち枯れ
(木々の根が腐り、土壌崩壊の危険)

農作物の被害防止だけでなく、新島の環境破壊を止めるためにも、鹿の絶滅を目標に努力を続けたい。(植松一男)